

提 言

COVID-19 の流行により変化した
感染症発生動向と今後の注意点

多屋馨子 (神奈川県衛生研究所)

2020年に国内初の感染者が見つかった新型コロナウイルス感染症 (coronavirus disease 2019: COVID-19) は、発生から3年が経過し、2023年4月14日現在、感染者数33,565,099人、死亡者数74,198人と報告されている (厚生労働省報道発表資料: https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000121431_00423.html)。新しいモダリティのワクチンが開発され、様々な治療薬が使えるようになったが、次々と出現する変異株の動向には今後も注意が必要である。感染症法に基づく感染症発生動向調査では、COVID-19は2023年5月8日から新型インフルエンザ等感染症 (2類感染症相当) から5類感染症定点把握疾患に変更となる。これまで3年間の徹底した飛沫感染・接触感染対策により、COVID-19以外の感染症の発生動向も大きく変化した。飛沫感染、接触感染で感染伝播する感染症に加えて、輸入感染症も激減した。見方を変えると、この3年間で小児には多数の感受性者が蓄積していることになる。



特に、麻疹と風疹は国内外の人の移動が少なかったことから、海外から国内へのウイルスの持ち込みがなく、麻疹は2021年、2022年ともにそれぞれ年間6人 (感染症発生動向調査: 暫定値) で、2008年の全数届出制度開始以降では最低の報告数が続いている。風疹も2021年12人、2022年15人 (感染症発生動向調査: 暫定値) と少なく、2018~2019年の年間2,000人を超える報告数と比較すると激減した。一方、第1期 (対象: 1歳) の麻しん風しん混合ワクチンの接種率は95%未満となり、15~16年前の接種率まで低下した。第1期の接種を受けそびれると、第2期 (小学校就学前1年間) まで受ける機会がないことから、幼児期の数年間を感受性者として過ごすことになる。また、成人男性に蓄積した風疹の感受性者をなくすために2019年から実施されている第5期風疹定期接種 (対象: 昭和37 (1962) 年4月2日~昭和54 (1979) 年4月1日生まれの男性15,374,162人) の接種率は伸び悩んでおり、2022年11月までに風疹抗体検査を受けた人が4,397,353人 (対象人口の28.6%)、抗体陰性あるいは低値で予防接種を受けた人は947,904人 (対象人口の6.2%) であり、海外から風疹ウイルスが持ち込まれると、再び風疹の流行が懸念される。今年の夏は久しぶりに海外旅行を計画している人々も多いと考えられるが、渡航前には少なくとも麻疹と風疹のワクチンを1歳以上で2回受けているかどうかを記録で確認して欲しい。

また、国内では梅毒やエムポックスの報告数が増加しており、性感染症対策も急務である。感染症の発生動向を監視するとともに、迅速かつ適切な感染対策と、体調が悪い時は通勤・通学・通園を控えるというCOVID-19対策で実践してきた方法は、今後も継続していきたい。